

【書評】二島憲一著『ニーチェ』 (岩波書店・一九八七年・新書・四八〇円)

— *Eigentlich sollte man uns dankbar sein*.....

Heinrich Böll — 山口 恵 三

本年一月の刊行と同時に数多くの書評に取上げられ、様々の議論を呼んだ本書に就て屋上屋を架すが如き論評を敢て試みようとするのは、大方の厚意ある評価にも関はず本書の真価が必ずしも十全には理解されてゐないからに他ならない。「云ふまでもないことであるが、本書は所謂『ニーチェ本』の類ひでも、生涯や思想の安直な概説書でもない。言葉の本来の意味に於て難解を極める一人の哲人を真正に理解しようとする情念の書であり、本書の出現によつて、日本はもとより東アジアに於けるニーチェ受容史は新たな段階に達するものと想はれる。少くとも本書は、「またもや一冊ニーチェについての本!」と云ひ棄てて済まされるやうなものではないのである。

本書の著者、三島憲一氏に就て改めて贅言を費すのは本来ならば不遜なことに相違ない。いやしくも日本のゲルマニストにして、白水社版『ニーチェ全集』に於ける氏の幾つか

の堅実な訳業を知らぬ者は一人もゐないからである。だが、世上にはドイツ学の敵がある。ひたすらドイツ系の思想や文化を憎悪することによつて生きる教養人なる者がゐる。彼等の存在は、哲学と文学との両極に分裂し自己閉塞に陥つてゐる現今のドイツ学にとつては寧ろ望ましいことであるが、他人様の解説を切貼りし、あげくの果は通俗小説の粗筋を書いてまで学術書の量産を画策する彼等には、三島氏のやうな良心的な研究者を理解することは至難の業であらう。そして、この書評はゲルマニストの為に書くのではなく、彼等ドイツ学の敵に向けて書かれるのであるから、ここで予め著者、三島氏の知的営為の一端を垣間見ておく方が良からう。

一九七〇年代前半を学生として過した人々の中には、三島憲一氏をナチズムの研究者と想つてゐる向きがあるやうであるが、それは些か一面的な見方であらう。確かに、三島氏はヘルマン・ラウシュニング著『ニヒリズムの革命』(筑摩書

房、一九七二年)の共訳者の一人として記憶されてはゐる。だが、狭義の政治思想史の限界内に三島氏が立尽してゐるのではないことは、例へば「生活世界の隠蔽と開示」(『思想』岩波書店、一九八三―四年)や「解釈学の現在」(『理想』第六二〇号 理想社、一九八五年)のやうな氏の論攷を一読するだけでも明白であらう。尤も、三島氏が、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルといった、ドイツ哲学の表通りだけの歩行者ではなかつたといふことそれ自体は極めて重要である。ドイツ精神史が、そして延ては西欧近代の成立そのものが、畢竟ひとつの「分裂」に他ならないといふこと、そしてそのことによつて、古代ギリシアの一元的な世界から近代ドイツが明瞭に区別されるといふことは、もつと注目されて然るべきである。(その「分裂」は遠くルターの『クリスト者の自由』に於ける「主」と「奴」の分離に端を発するのであるが、その「分裂」は単なる觀念の領域には留まらず、現実生活に於ける栄光と悲惨をも齎したのである。)ヘルダーリンやノヴァーリスの子供達が何故あのナチズムの蛮行に走つたのか、といふ疑念が三島氏の思想の核心にあることは、氏が担当する放送大学の講座「ドイツの言語文化」を受講した者には分명한ことであらう。明治以来のドイツ哲学の紹介者達が、稍もするとドイツ精神史の光輝にのみ眼を奪はれ、その暗黒の部分に触れることを回避し続けて来たことを想ふと、

氏の問題意識が如何に新鮮で公正なものであるかが分らう。因みに、三島氏がハインリヒ・ハイネ『ドイツ古典哲学の本質』に高い評価を与へてゐることに触れておきたい。(『図書』岩波書店、第四五四号、一九八七年、七十九頁。)

さて、三島氏が純学術的な専門書ではなく、本書『ニーチェ』のやうな入門書風の書物を著すのは単独執筆としては極めて珍しいことである。ニーチェのやうな思想家の場合、専門的な論文を書くのは或る意味では容易であるが、このやうな一般向けの読物に仕上げる困難は並み大抵のことではないであらう。一見するとカントやヘーゲルに比べれば、哲学に抵抗を感じずる人々にも取つき易さうに想へるし、三島氏自身さう述べてゐる(本書、四頁)。しかし、その取つき易さが却つて障碍となつて、カントやヘーゲルに比して甚だ恣意的な解釈を許して来た嫌ひがあつた。それはひとつにはカントの場合、*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* のやうな比較的理解し易い論著があるが、ニーチェにはそれに相当するやうな作品が見出し難いといふこともあらう。ドイツ語の原典を参照するといふことも必要条件であつて十分条件ではない。『ツァラトゥストラ』を原典で味読すること三十数回に及んだ中村草田男の如きも、そのニーチェ解釈は兎戯に類するものであつたし、かの文豪、魯迅も恐らくナウマン袖珍本と想はれる同書の原典を参照した形跡があるが、終生社会ダーウニズ

ムの枠内でしかニーチェを捉へ得なかつた。(そもそも書名にして「*Also sprach Zarathustra*」の *sprach* が「語つた」ではなく「言つた」であるといふことさへ水上英廣訳の出現まで大多数の日本人は知らなかつたのである。)本書「ニーチェ」は思索者ニーチェを過去のこのやうな不幸な受容史から解放し、社会思想史上の文脈に正置したうへでニーチェの個人史を辿りながら読者を真のニーチェ理解へと導いていくのである。本書を貫いてゐるのは、ニーチェに関するこれまでの誤解や誤読、といふより寧ろ仮面と実相との交錯によつて不可避となつた「歪んだ理解」からニーチェを掬ひ上げ、救ひ出さうとする著者のパトスである。叙述の仕方も予備知識なしでも理解出来るやうに配慮されてゐながら、学問的な厳密さが損はれてゐないのは見事と云ふ他ない。例へば、本書の第二章はゲーテとニーチェとの対比で始つてゐるが、日本では通常「文学者」として片付けられがちなゲーテを正面から取上げてゐる点など、かのカール・レーヴィットの大著『ヘーゲルからニーチェへ』(Karl Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche, Der revolutionäre Bruch im Denken des 19. Jahrhunderts*, 1941)の冒頭「ゲーテとヘーゲルとの関連が扱はれてゐた箇所を彷彿させる。(念の爲付言すると、「ゲーテとヘーゲル」とはけつして些細な問題ではない。)他にも例へばヘルダーリンへの所を得た言及など凡百のニーチェ入門書の

追隨を許さぬものがある。また、ミヒャエル・エンデの『モモ』(Michael Ende, *Momo*, 1973)の冒頭部分の紹介(本書八十二頁。)などからも哲学的素養と文学的感性とを併せ持つ著者の見識の高さが伺はれる。(因みに、三島氏は「啓蒙と反啓蒙とはさまで」と題する今村仁司氏との対談でもミヒャエル・エンデに言及してゐる。「現代思想」第十四巻第十一号、青土社、一九八五年、二百八頁。)

ところで、『悲劇の誕生』の成立を巡る問題がニーチェ理解の鍵であるのは云ふまでもないが、従来の「文献学から哲学へ」といつた単線的な理解ではニーチェの時代批判の持つダイナミズムは全く見えては来なかつた。ニーチェのかかる転換は、近代の歴史認識から歴史それ自体を救済する為に「原典とは畢竟一個の觀念ではないか」(西尾幹二)といふ恐るべき、しかし真実の洞察を自らのものとすることに他ならなかつたのである。それは「文献学」で「哲学」との二者択一として片付けられるやうな性質のものではなく、両者の関係は一種ヘーゲル的な色調を帯びた事態であつた筈である。それどころか、ヘーゲル的なものによるヘーゲルの克服が企図されてゐたとさへ云へるであらう。本書の枢軸をなすテオドル・アドルノとマクス・ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』の三島氏による援用が光彩を放つてゐる理由の一つはそこにある。さて本書のやうな稀にみる良書にも、疑問点や不満な箇所

が皆無ではなかつた。書評に於ける礼儀としてそれらにも批判しておくべきであらう。求められてゐるのは拍手ではなく批判であらうから。先づ、ニーチェに於けるソクラテス理解である。著者の『悲劇の誕生』の解釈そのものは文言のうへからは全く正しい。しかし、ソクラテスの（といふことは延いてはソクラテス記述者としてのプラトンの）「理性」そのものに對してニーチェが果して然程否定的な評価しか与へてゐなかつたらうか、といふ疑問が残る。プラトンの「国家」へのニーチェの讚美を顧慮するまでもなく、「ソクラテスからの離反」(Entsokratisierung)こそがニーチェにとつて「超克されるべき」近代人の姿ではなかつたのだらうか。それはソクラテス・プラトンの「理性」を近代合理主義の「理性」と等置してよいのかといふ疑問に他ならない。この疑問があればこそ、『悲劇の誕生』は古代ギリシアに仮託して実は近代ドイツの根源的批判を行つた書なのだ、といふ見方も成立するのであるが、本書ではこれら二つの「理性」が同じ言葉で語られるため多少の曖昧さが残つた感がある。次に、本書第六章から第八章にかけて「力への意志」「永遠回帰」「超人」といつた主要な概念が登場するが、それらの個々の概念に就ては極めて分り易い書き方が為されてゐるにも関はず、それらの概念相互の關係が今一つ明瞭に見て取れない怨みがある。ニーチェの哲学が「アフォリズムから成る体系」(レーヴィット)

であるとすれば、それら個々の概念相互の脈絡こそが重要なのではないだらうか。また、第九章の「ニーチェ以後」ではニーチェこそ現代の諸々の思想の産みの親なのだといふことが余り強調されてゐないやうな印象を受けた。所謂「ポスト・モダン」に言及するくらゐならブーバーやピカートやオルテガに触れて頂きたかつた。或いは、ヨハン・ホイジンガーが『ホモ・ルーデンス』などと云ひ出す背景にニーチェの Spiel があつたといふことの方が遥かに重い意味を有してゐるのではないだらうか。フランクフルト学派のアドルノやホルクハイマーやハーバーマスといふ云はば表通りの思想家だけでなく、例へば責任論を軸として独自のニーチェ解釈を行つたゲオルク・ピヒトのやうな思索者にも眼を向ける必要がある。つたやうに想ふ。尤も、本書のやうな入門書としての枠内でそれらを要求すること自体が無理といふものである。寧ろその制約の中でこの偉業を果された著者の勞をこそ多くすべきであらう。

△追記▽(一) 本文で触れたこととも関連するが、ニーチェの「大いなる正午」(der große Mittag)といふ概念がプラトンの「洞窟の比喻」を念頭に置いたものであることは、哲学史の寧ろ初歩的な知識に属する。すなはち、「大いなる正午」とは「影」(直接意識の虚偽性)が消失する地点を示してゐるのであつて、所謂「永遠回帰」の思想上の意義は、

このプラトニズムの成果たる「大いなる正午」を「背世界」から救済しようとする点にあつたと云へる。三島氏の「力への意志」と「永遠回帰」との関係に就ての指摘には見るべきものもあるが、この点の理解を曖昧に済ませるならば、ハンナ・アレント風の云ひ方で「歴史と論理との混同」とでも云ふべきものに終始する危険がある。

△追記▽(二) さうした見方は哲学屋のニーチェ理解であつて、文学的ニーチェ像はそんなものではないと云ふ者が万が一にもゐるならば、そもそもニーチェに限らず、文学研究が哲学から離れて独立自存し得るとする根拠など有る訳がないと応へる他あるまい。同様に、哲学に「ギリシア哲学」と「ドイツ哲学」の二種類が有ると想つてゐるやうな愚か者は自らの専門主義の壁の中で窒息するが良からう。とまれ、ドイツ学の敵たる昨今の比較文学徒こそ、本書のやうな良書を熟読吟味すべきである。

△追記▽(三) 本年十月に刊行された藤原保信他編著『ハーバーマスと現代』(新評論)の第一章をなす「芸術による反抗の位置づけをめぐる——ニーチェとハーバーマス——」は三島氏の執筆になるものであるが、関心の有る方には併読をお奨めする。